

琥珀の風

きらめきの地域デザイン

あおいかぜ

特集
感動の大地

69

2010 July

特集
感動の大地

青い海と緑の山々に恵まれた中国地域に、地域づくりの風が吹き始めています。自分たちの大好きなこの街を少しでも良くし、子どもたちにしっかりと手渡したい。こんな気持ちで頑張っている人たちがいっぱいいます。「碧い風」は、そんなまちづくり人を結びながら、自分たちのまわりにある魅力を高め、きらめくような中国地域にしていくな媒体にしていきたいと思っています。強くはないが、楽しい風。そんな風を、みなさんと一緒に巻き起こしたいと考えています。

きらめきの地域デザイン
碧い風
あおいかぜ

69
2010 July

contents

- 3 視点 日本の大地の魅力と文化 財団法人国際高等研究所 所長 尾池和夫
- 4 ジオパークの魅力と地域振興 小泉武栄
- 6 日本海形成のダイナミクスを体感する山陰海岸ジオパーク 《鳥取県・兵庫県・京都府
- 8 島の人たちが主体となって地域を学ぶ隠岐ジオパーク 《島根県隠岐》
- 10 先人の情熱を受け継ぎながら、峡谷美を守り続ける三段峡 《広島県安芸太田町》
- 12 サンゴ礁から生まれ変わり、宮殿のように輝く秋芳洞 《山口県美祿町》
- 14 磐窟深・磐窟洞 《岡山県高梁市》
- 15 「若者たちの地域づくり」④ より高いレベルから環境問題に取り組む学生ISO委員会 《鳥取市》
- 16 「地域に生きる企業家群像」⑥⑨ 萩ケーブルネットワーク株式会社 社長 刀禰勇 《山口県萩市》
- 20 「企業連携レポート」① 県内企業が連携して、スギヤヒノキの樹皮を活用した環境緑化ボードを開発 《鳥取市》
- 22 「キラリ、輝く元気企業」④② ヒト細胞の体外培養技術を活用して医療の高度化をサポートするフエックスバイオ 《広島県東広島市》
- 24 「夢紡人／ゆめつむぎびと」⑥⑤ 特産の帆布を通して尾道を「人と人のふれあいの街」へと進化させていく木織雅子さん 《広島県尾道市》
- 27 「ご当地B級グルメ」① 日生力キお好み焼き 《岡山県備前市日生》
- 28 「藩ものがたり」④ 岩国藩 《山口県岩国市》
- 30 「庭園逍遥」⑭ 旧津山藩別邸庭園(衆楽園) 《岡山県津山市》
- 32 「国宝の旅」④ 神魂神社本殿 《島根県松江市》

表紙写真：三段峡の黒淵 写真：広島県安芸太田町
目次写真提供：風待ち海道倶楽部、広島県安芸太田町、岡山県高梁市
表紙デザイン：久原 大樹（広島市在住）

*本誌は再生紙を使用しています。

特集
感動の大地

視点

日本の大地の
魅力と文化

財団法人国際高等研究所 所長

尾池和夫

二〇〇九（平成二十一）年に「洞爺湖有珠山地域（北海道）」「糸魚川地域（新潟県）」「島原半島地域（長崎県）」の三地域が世界ジオパークネットワーク

ワークに加盟し、日本でもジオパークへの関心が高まってきた。ジオパークとは、ジオ（地球）とパーク（公園）の造語で、地球全体の仕組みを学ぶ「地球公園」



である。二〇〇四（平成十六）年にユネスコ（国際連合教育科学文化機関）が支援して発足したものだ

ユネスコは一九七二（昭和四十七）年に世界遺産を制度化しているが、世界遺産が保存を大きな目的としているのに対して、ジオパークは地球の遺産を活用することを重視している。したがって

地層に触れたり、地球と人類の営みの歴史を知ること、地球の仕組みを学ぶことを大きな目的としている。その点で、ジオパークには観光振興や地域振興に生かそうという期待も寄せられている。

ジオパークの発想が生まれたのは、安定した大地で古い地層などが数多く残っている欧州である。それに対して日本は地殻変動が激しい「変動帯」である。地球を学ぶためには、古い地層も必要であるが、日本のように変動し続けている大地を知ることも必要だ。その点において日本のジオパークが世界に果たす役割は非常に大きい。

日本列島が誕生したのは今から一五〇〇万年前のことだ。大陸の一部が割れて日本海が形成され、日本列島が誕生した。四十六億年といわれる地球の歴史からすれば、ほんの少し前のことである。つまり、日本海は世界で最も新しい海なのである。

非常に大きな意味を持っている。日本海の海岸線に残る地層などは大地の割れ目そのものであり、まさに大地のなせるワザだ。こうしたジオパークは世界的にも非常に珍しいもので、その意味でも世界ジオパークネットワークで果たす役割は大きい。

と同時に、暖流が流れ込む日本海は多くの雪や雨、さらには海の幸をもたらすとともに、豊かな生活文化などを形成してきた。日本文化を代表する日本酒も活断層と豊かな水の恵みであるし、先端的な半導体産業も水の存在なしには生まれなかった。その意味で日本列島の文化は「変動帯の文化」であるといえる。

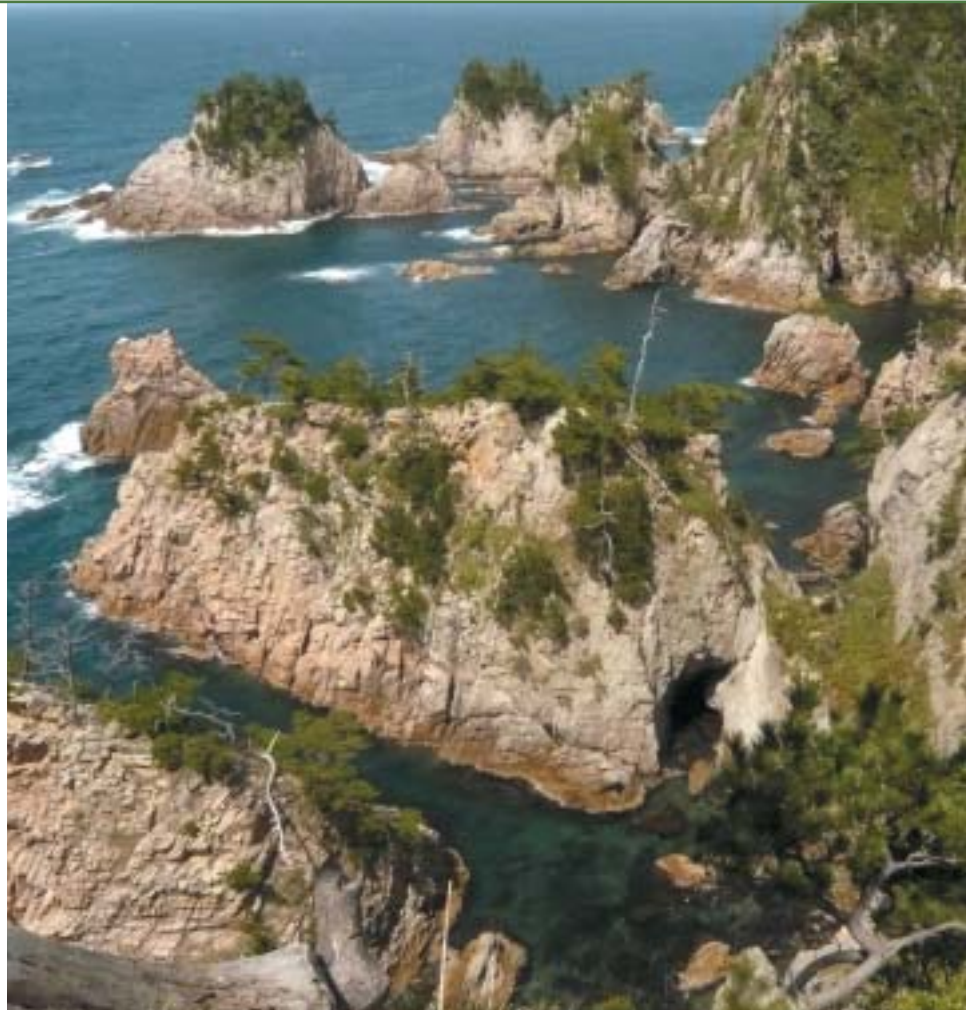
二十一世紀を迎えて、人類はエネルギーや生物の多様性、生命科学といった課題を抱えている。それを解決する上で欠かせないのは地球の仕組みを学ぶことである。その点においてもジオパークの役割は非常に大きい。

profile

尾池和夫 おいけかずお
1940年東京生まれ。財団法人国際高等研究所所長、理学博士。大学を卒業後、京都大学教授、京都大学総長を経て、2009年から現職。主な著書に、『日本地震列島』『活動期に入った地震列島』『変動帯の文化』などがある。

ジオパークの魅力と地域振興 小泉武栄

ジオパークの魅力は、地形や地質、植物、人間の営みといった「大地の総合性」を読み取ることで新しい感動を得ることだ。そのためには、地域の人たちが主体的に地域の自然や文化などの魅力を学び、多くの人たちに発信することが必要である。



日本海形成の地層を示す鳥取県の浦富(うらどめ)海岸(写真提供:鳥取県)

地域振興と密接な ジオパーク

二〇〇九(平成二十一年)年に、日本で初めて三方所が世界ジオパークに認定され、今年度は山陰海岸ジオパークが申請中である。

世界ジオパークの認定を契機に、日本でもジオパークに対する関心が少しずつ高まり、新聞や雑誌などで取り上げられることが多くなった。特に、地域の自然を地域振興に役立てたいと思いつけている地元自治体や住民にとって、ジオパークは地域振興の大きな要因として期待されている。

その一方で、残念ながら、ジオパークを「世界遺産の地質・地形版」と思い込んでいる人も多い。しかし、両者の間には大きな違いがある。

世界遺産はまさに人類にとって貴重な「財産」であり、基本的に保護することを目的としている。一方、ジオパークはジオ(地球)に関する自然遺産を保護しながら、それを教育や研究、科学の普及、さらには観光による地域振興などに活用することを主な目的としている。

ジオパークの 総合性とその魅力

ジオパークのもう一つの大きな特徴は総合性である。ジオパークには、大地の景観や地質だけでなく、そこに分布している植物、さらには人間の営みなども含まれる。

例えば、全国各地に残る棚田などもジオパークの一部である。こう言うと意外に思われるかも知れないが、棚田は美しい光景であるだけでなく、米を作るために厳しい大地を切り開いてきた人々の大変な努力のたまものである。その意味では、人間の営みが作り出した大地そのものであるといえるし、実際、欧州の人たちからは感動をもって高く評価されている。

総合性を特徴とするジオパークを楽しむ、地域振興に生かすためには、大からは好評を得ている。長野県のガイドの場合、高山植物などの説明は不可欠であるが、最近ではツアー客も植物について詳しくなっている。そのため、一般的な解説では満足しなくなっている。そこで、私が地形や地質の解説を行っているのだが、それを取り入れることによって解説の幅が広がり、ツアー客からの反応が良くなっているという。

これはガイドだけの問題ではない。これからのジオパークのあり方を考えれば、地元の子どもたちや大人たち、さらにはお年寄りたちが自分たちの地域に強い関心を持ち、主体的に勉強を重ねていくことも必要になってくるであろう。また、そうした人々を幅広く含むこともジオパークの大きな目的の一つでもある。

その意味で、ジオパークには地元の人材を育成することがなによりも必要といえる。

地を理解し、その成り立ちや人間の営みなどを読み解くことが必要である。

自然が織りなす美しい大地を目にすると、私たちは思わず感動し、時には涙ぐむこともある。それは素晴らしいことではあるが、ジオパークには感動するだけでなく、どうしてここに大きな滝が生まれてきたのか、どうして高山植物が低地や海辺に咲いているのかなどを考え、理解することが必要だ。それによって、より高いレベルでの感動を得ることができよう。

新しい感動をもたらす ジオツアー

そうした大地の感動を得るために企画されているのがジオツアーである。ジオツアーはまだ一般的ではないが、最近では好奇心旺盛な「団塊の世代」を中心に参加者が急増している。

ジオツアーを活性化するために私もガイド役を務めているが、昨年行った三泊四日の山陰のジオツアーには東京から三

十数名が参加したし、今年の紀伊半島のジオツアーにも四十七名が参加を申し込んでいる。それほど、大地の成り立ちや自然の奥深さを学ぶジオツアーに対する関心は高まっているのだ。

ジオツアーの参加者が異口同音に言うのが、「日本の自然がこれほど多様で、奥深く、そして魅力的であるとは知らなかった」ということだ。参加者たちは地球の歴史や植物の分布、人間の営みなどを知識として知ってはいるが、それを目の当たりにすることはほとんどなかった。だからこそ、大地に立つて地球の歴史や大地と人間の営みなどを読み解くことで、まったく新しい感動を得、新しい魅力を発見しているのだ。

「なぜ」を問い続けることが 魅力的なガイドへの道

こうした関心に応え、ジオパークにおける観光振興、さらには地域振興を図っていくためには、自ら大地の成り立ちや動植物の分布などを読み解き、観光客に解説できる地元住民、とりわけガイドが不可欠である。

ガイドに求められるのは、例えば島根県の隠岐であれば、「これはタルギキクというキク科の多年草です」という解説ではなく、「タルギキクは日本海沿岸にだけ咲く珍しい花です。氷河期の生



夕日を受けながら日本海に立つ隠岐のローソク岩(ひかわ) 写真:古川 誠(島根県斐川町在住)



ジオパークの重要なポイントとなっている地元ガイド(写真提供:風待ち海道倶楽部)

地域の人材育成こそが 重要なポイント

私も長野県で地元ガイドを養成するガイド役を務めているが、地元ガイドか

profile

小泉武栄 こいずみ たけいし
1948年長野県生まれ。東京学芸大学教授、日本ジオパーク委員会委員、理学博士。大学院博士課程修了後、東京学芸大学教授。主な著書に、『山の自然学』『登山の誕生』『自然を読み解く山歩き』などがある。

日本海形成のダイナミクスを体感する 山陰海岸ジオパーク

《鳥取県・兵庫県・京都府》

鳥取・兵庫・京都の三府県にまたがる山陰海岸ジオパークは、日本海形成の歴史を今に伝える貴重な「地形・地質の博物館」である。と同時に、大地の恵みを生かした人々の歴史や文化を伝えることで、地域社会の持続的な発展を目指している。



ダイナミックな地層を楽しむ人も多い浦富海岸（写真提供：鳥取県）

日本海の貴重な「地形・地質の博物館」

日本ジオパーク委員会が日本初となる「日本ジオパーク」を認定したのは二〇〇八（平成二十）年。認定された地域は七地域で、その一つが山陰海岸国立公園を中心とした山陰海岸ジオパークである。

山陰海岸ジオパークのエリアは鳥取・兵庫・京都の三府県にまたがり、西は鳥取市の白兎海岸から東は京都府京丹後市綾ヶ岬までの、東西約二一〇キロメートル、南北最大約三〇キロメートルという広大なエリアである。

山陰海岸ジオパークの大きな特徴は、「地形・地質の博物館」であることだ。日本海の形成が始まったのは、一五〇〇万年前とされるが、山陰海岸ジオパークに

鳥取県は、二〇〇七（平成十九）年に他府県の行政機関及び関係団体とともに、「山陰海岸ジオパーク推進協議会（事務局は兵庫県）」を設立してジオパークを推進している。その鳥取県の担当が観光政策課山陰海岸ジオパーク推進室だ。

安藤専門員が強調するように、山陰海岸ジオパークでは地形・地質の魅力を発掘しながら、自然や文化、歴史といった地域ならではの良さの再発見、再評価にも力を注いでいる。それを一つにまとめたのが「山陰海岸ジオパーク構想」である。

山陰海岸ジオパーク構想は、地質遺産を保全するとともに、教育への活用、地域の歴史文化資源と合わせて、特徴

は日本海形成にかかわる多様な火成岩類や地層、日本海の海面変動や地殻変動によって形成されたリアス式海岸や砂丘をはじめとする多彩な海岸地形が数多く残っており、貴重な地形・地質遺産を多く確認できる。

山陰海岸に凝縮された日本海形成の歴史

山陰海岸ジオパークには、まだ日本海がアジア大陸の一部であった頃の地層が残っている。最も古いものは、兵庫県新温泉町の「鬼門崎」の岩層で、七〇〇〇万年前の岩層とされている。また、六〇〇〇年から五〇〇〇万年前の花崗岩が鳥取県岩美町の「浦富海岸」や新温泉町の「田井ノ浜」などでも確認できる。

その後、二七〇〇万年から二〇〇〇万年前にはアジア大陸で起きた地殻変動によって大陸が割れ始め、二五〇〇万年前には地溝帯が形成された。やがて岩の裂け目から吹き出した安山岩が広く大地を覆うようになつた。この時代の安山岩は獅子が赤い口を開けているように見える「獅子ノ口」（新温泉町）や、孤立した岩が海面上に直立している「屏風岩」（京丹後市）などで確認できる。

地域の連携・ネットワーク化で魅力を高める

山陰海岸ジオパーク構想で特徴的なのは、それぞれの地域が連携しながらネットワークを構築していることだ。例えば、既存施設の特徴をフルに生かしながら「ミュージアムネットワーク」の構築を図り、各施設のスキルアップと、展示や活動の交流を広げている。また、調査研究についても効率的な推進を図ろうとしている。

「ガイドの養成など課題はたくさんありますが、協議会に参加している三十七団体が連携しながら、山陰海岸ジオパークの魅力の世界に発信していきたいと考えています」と、安藤専門員は語った。七〇〇〇万年前からの大地の歩みを今に伝える山陰海岸ジオパークは、多くの人たちに日本海形成のダイナミクスを体験してもらつとともに、その恵みである文化や歴史の魅力も提供している。



ユーラシア大陸の地殻の一部であった花崗岩から成る浦富海岸の千貫（せんがん）松島（写真提供：鳥取県）

万年前にはアジア大陸で起きた地殻変動によって大陸が割れ始め、二五〇〇万年前には地溝帯が形成された。やがて岩の裂け目から吹き出した安山岩が広く大地を覆うようになつた。この時代の安山岩は獅子が赤い口を開けているように見える「獅子ノ口」（新温泉町）や、孤立した岩が海面上に直立している「屏風岩」（京丹後市）などで確認できる。

日本海が拡大し続けたのは一八〇〇万年前から一五〇〇万年前である。この時代の岩石としては、兵庫県豊岡市の「淀洞門」、「はさかり岩」で知られる礫岩層、兵庫県香美町の「但馬赤壁」の火山岩などがある。

さらに、五〇〇万年前に日本海の拡大がほぼ終わるころを迎えると、流紋岩の噴出が活発化してきた。その形跡が残っているのが兵庫県豊岡市の「宇日

流紋岩」で、美しい渦巻き模様の流理を見ることができる。また、山陰海岸でも屈指の景観を誇る「鎧の袖」（香美町）や、名勝及び天然記念物に指定されている「但馬御火浦」（香美町）の「三尾大島」や「窓島」（別名めがね橋）などの岩脈もこの時代に形成されたものである。

まさに、日本海形成の歴史が山陰海岸に凝縮されているといえる。

地域の持続的な

発展を目指すジオパーク構想

「多様性に満ちた地形・地質遺産だけでなく、多様な生物や大地の恵みを生かした人々の暮らしや文化なども山陰海岸ジオパークの大きな特徴だと考えています」。こう語るのは鳥取県観光政策課山陰海岸ジオパーク推進室の安藤和也専門員である。



丹後半島の海岸段丘と屏風岩の夕暮れ（写真提供：京都府京丹後市）

島の人たちが主体となって 地域を学ぶ隠岐ジオパーク

《島根県隠岐》

一万年前に離島となった隠岐では、興味深い地層や地質がいたるところで露出し、植物の進化を間近に知ることができる。「この「宝物」を知ること」「本当の隠岐」を理解しようという島の人たちの活動はやがてジオパークへと進化していった。

一万年前に誕生した離島

島根半島沖に浮かぶ隠岐は四つの有人島と百八十余りの無人島からなり、本土側にある三つの島を島前、その北側にある最も大きな島を島後と呼ぶ。

隠岐は島前・島後とも激しい火山活動で形成された島である。島前の三島は外輪山が水没を逃れてできた島で、三島に囲まれた内海はカルデラの海である。日本海の特徴でもある荒れた外海との対照的な景観を醸し出している内海は見る人の心を和ませてくれる。

隠岐が現在のような離島になったのは今から一万年前で、それまでに大陸の一部であった時代、湖の底であった時代、海の底であった時代、島根半島の先端であった時代と形を変えてきた。



マグマが冷却の過程で柱状に割れた柱状節理

ろうつといことだ。

「それまでも自然保護や文化などをテーマとした団体はいくつもありましたが、一緒になつてまちづくりに取り組もうとなったのです。」。こつ語るのは風待ち海道倶楽部事務局の野辺一寛さんである。結成にあたり、風待ち海道倶楽部がまちづくりのコンセプトとして掲げたのはエコツーリズムである。隠岐ならではの自然や文化、歴史を生かし、自然を保護しながら観光振興や地域振興を図

といても、島の人たちのほとんどは島に流された後鳥羽上皇や醍醐天皇、雄大な自然の美しさは知っていても、それ以外の歴史や自然の成り立ちなどについてはほとんど知らなかった。そこで、風待ち海道倶楽部が始めたのが島の人たちを対象とした「風待ち海道エコツーリズム大学」だ。倶楽部のメンバーも講師を務めるエコ



岩質の異なる部分が浸食されて作り出された全長 26 m のトカゲ岩



隠岐の固有植物であるオキシヤクナゲ。他のヤクナゲより丸みがあり、花の下の葉が小型である。

ツーリズム大学は年二十回以上開催され、参加者は少しずつ増えるとともに、受講者の理解も着実に深まっていた。島の人たちが主体となって、島の成り立ちや地質、動植物など、「本当の隠岐」を学んでいたのだ。

その成果を集約したものの一つが、風待ち海道倶楽部が発行する「隠岐島エコツーリズム」のガイドブックである。当初は約八十ページであったガイドブックは、エコツーリズム大学や研究者たちとの交流を重ねるとともに内容も充実し、今では百五十ページになっている。しかもその内容は専門書に匹敵するほど詳細な内容で、島の人たちが執筆したとは思えない内容だ。

まるで隠岐のためのジオパークだ

エコツーリズム大学を継続するなかで、メンバーの一人である八幡浩二さんから「ジオパークを目指さないか」という声が寄せられた。八幡さんは隠岐黒曜石のアクセサリーなどを製造・販売しており、昆虫をはじめとして島の自然について深い知識を持っている。科学雑誌でジオパークのことを知った八幡さんは、自分たちの活動はジオパークそのものであり、それを広く伝えるためにジオパークを目標にしよつと提案したのだ。



エコツーリズム大学を通じて島の人たちは地域の魅力を知っていった。

こつした島の成り立ちを示す地層や地質が島のいたるところで露出しているのも隠岐の大きな特徴である。例えば、島後の基盤は国内最古の岩石である隠岐片麻岩で、山の中腹に広く分布している。島後の海岸線は緑色凝灰岩（グリーンタフ）も見られ、この地層からはこの島の化石や淡水性の貝化石が発見されている。このことは一八〇〇万年前に隠岐は湖の底で、亜熱帯の気候であったことを示している。また、島後の西海岸を構成するアルカリ流紋岩類も本土ではあまり見られない、隠岐を代表する岩石であり、隠岐黒曜石など貴重な岩石も産出される。

こつした地形や地質とともに、隠岐では北方系、南方系の植物、高山性、低山性、大陸性の植物、そして氷河期時代の植物が共存し、北方系のモミヅキに南方系のナツランが着生するといった不思議な光景も見られる。隠岐は日本列島の植物分布の過程を知る上で、非常に貴重な島であるといえる。

まちづくりのコンセプトはエコツーリズム

この隠岐で、特徴的な島の自然や歴史、文化などをまちづくりに生かそうという「風待ち海道倶楽部」が生まれたのは二〇〇三（平成十五）年である。

「まさに隠岐のためのジオパークだとさえ思いました。自分たちがこれまで取り組んできた活動と目標がびつたり合致し、それ以降の活動の方向性が明確になってきました」と、野辺さんは振り返る。こつして、二〇〇九（平成二十一）年には隠岐ジオパーク推進協議会が設立され、日本ジオパークネットワークにも加盟した。

野辺さんは隠岐のすこさを認識するにはまだまだ時間がかかるという。それでも最近では島の人たちから新しい情報が提供されることが増えた。また、子どもたちの間でも上級生から下級生に知識が伝えられるようになってきた。本当の隠岐を知ること、島の人たちの思いは、ジオパークと出合うことでよりレベルアップを図ろうとしているようだ。

先人の情熱を受け継ぎながら、 峡谷美を守り続ける二段峡

《広島県安芸太田町》

河川の激しい浸食で生み出され、四季折々に美しい峡谷美を見せる二段峡。日本屈指の名峡として知られる二段峡を世に知らしめた二人の情熱を引き継ぐように、地元の人たちはその峡谷美を守り続けている。



絶壁と原生林、エメラルドグリーンの水面が神秘的な雰囲気を出す猿飛

全長約一三キロメートルの
長大な峡谷

広島市内を流れる太田川をさかのぼること約六〇キロメートル。そこからは柴木川と横川などで形成された日本屈指の名峡・二段峡が伸びている。二段峡は全長約一三キロメートルにおよぶ長大な峡谷で、峡谷沿いの遊歩道を歩くと、見事な景観が次々と来訪者を迎える。

二段峡は、自然の織りなす素晴らしい景観から、一九二五（大正十四）年には国の「名勝」に指定され、一九五三（昭和二十八）年には国の「特別名勝」の指定を受けている。名勝とは、庭園や峡谷、山岳などのうち、優れた国土美として欠くことができず、しかも風致景観の優れたもの、名所の価値や学術的価値、芸術的価値が高いものとして指定されたものだ。

さらに、その中でも重点的に保護すべきものが特別名勝で、峡谷等では黒部溪谷（富山県）や瀬八丁（和歌山県・奈良県）などがある。

巨大な自然の営みが 作り出した峡谷美

二段峡の美しさは大地の織りなす美である。二段峡は典型的なV字谷で、

式に「三段峡」と命名された。特に景観の優れた黒淵、三段滝、二段滝、猿飛、三ツ滝は峡中の「五大景観」と呼ばれることになった。ちなみに、三段峡とはこの地域が中国の三峨、三峡に似た景勝地であることから命名されたものだ。

先人たちの情熱を 引き継いで峡谷美を守る

名勝指定に奔走した二人の先人の理念や情熱を受け継ぐように、二段峡では今でも地元の人たちによって峡谷美を守ろうという活動が展開されている。

「ホテルや民宿、お土産店などで構成される三段峡観光同業組合は毎年、春と秋のシーズン前に峡内の歩道整備や清掃などを行っています。また、多くの観光客を迎え入れるために、地元ではボランティアガイドのグループを結成し、二段峡の魅力をより堪能できるよう努力しています」と、安芸太田町産業観光課の梅田幹二主査は説明してくれた。さらに、二段峡を流れる清流の水質を把握するために、中国電力株式会社では安芸太田町と協力し、水質調査も行っている。

こうした地元の人たちの地道な活動によって、二段峡は今でも四季折々の美しさを提供し続けている。

雑誌『峡友』の中で紹介されている。住民たちは、峡谷美を守るためにも名勝の指定を受けようと考えたのだ。やがて、国から調査隊が入峡し、指定に向けた調査が始まった。

しかし、折からの豪雨で調査隊は足止めを余儀なくされ、調査の中止も危惧された。その時、住民たちは豪雨の中、道もない難所を歩き続けて調査隊に食料などを届け、調査の継続を支援した。まさに、地域一体となって名勝指定に取り組んだのである。

こうして一九二五（大正十四）年に名勝に指定されるとともに、名称も正



120mの奥行きに三段の滝がある三段滝

東の深入山や西の恐羅漢山をはじめとする一〇〇メートル級の山々はその残丘と考えられている。

二段峡が位置する西中国山地には断層谷が数多くあり、しかも三段峡のある地域は広島県内でも雨の多い地域である。そのため、上流の八幡盆地に集まった水は、断層谷を横切る方向に流れ、激しい浸食を繰り返しながら柴木川として流れている。その結果、標高約七五〇メートルの八幡高原から標高約三五〇メートルの三段峡入り口まで蛇行しながら下る柴木川などは、三ツ滝や三段滝、猿飛をはじめとした多くの滝や淵、高い絶壁を作りながら三段峡の峡谷を生み出したのである。

約一三キロメートルの峡谷の間には断層や節理など多くの地学現象が見られ、この巨大な自然の営みが三段峡の峡谷美を作り出していることを教えている。また、峡谷を静かに抱きかかえるような山々の樹木は、春の新緑や晩秋の紅葉をはじめとして四季折々に彩りを変え、峡谷美を一層引き立てている。

三段峡を世に知らしめた 二人の先人

日本の峡谷美を代表するとさえいわ

れる二段峡であるが、その存在が広く知られるようになったのは今から約九十年前で、そこには峡谷美に魅せられた二人の男の情熱と苦闘があった。写真家の熊南峰と教師の齋藤露翠である。

写真集の撮影のために三段峡がある戸河内村（現・安芸太田町）に足を運んだ熊と、教師として赴任していた齋藤が出会ったのは一九一八（大正七）年のことである。二人は現地を目にした峡谷の美しさに心を打たれ、何百回となく入峡しながら、それを世に広く伝えようとした。

その情熱はやがて実を結んだ。地元新聞社が組織した探検隊が入峡し、その探検記が掲載されると、峡谷の素晴らしさは広く県民の知るところとなり、多くの探勝者が二段峡を訪れるようになったのである。

二段峡が知られるようになると、地元の人たちは三段峡保勝会を設立し、名勝天然記念物の指定に向けた活動を開始したことが

サンゴ礁から生まれ変わり、 宮殿のように輝く秋芳洞

《山口県美祿市》

秋芳洞は、日本最広のカルスト台地・秋吉台の地下に広がる巨大な鍾乳洞である。そこでは、サンゴ礁を形成する石灰岩が雨水に溶かされ、鍾乳石や石灰華、石筍といった二次生成物がまるで宮殿のように輝いている。

サンゴ礁から生まれた カルスト台地

山口県のほぼ中心部に広がる秋吉台は、面積が約九三平方キロメートルにもおよぶ、日本最広のカルスト台地である。カルストとはもともとスペインのクラス地方が語源である。クラスとは岩石を意味する言葉で、この地方には石灰岩が厚く分布し、溶食による地形が広く見られることから、石灰岩でできている大地をカルストと呼ぶようになった。カルスト地形は石灰岩が水で溶かされて形成される。石灰岩の主な成分である炭酸カルシウムは、空気中の二酸化炭素を含んだ雨水によって少しずつ溶かされ、石灰岩地特有の地形を形成している。その結果、カルスト台地の地表にはラベエ（石灰岩の柱）やドリーネ（月の

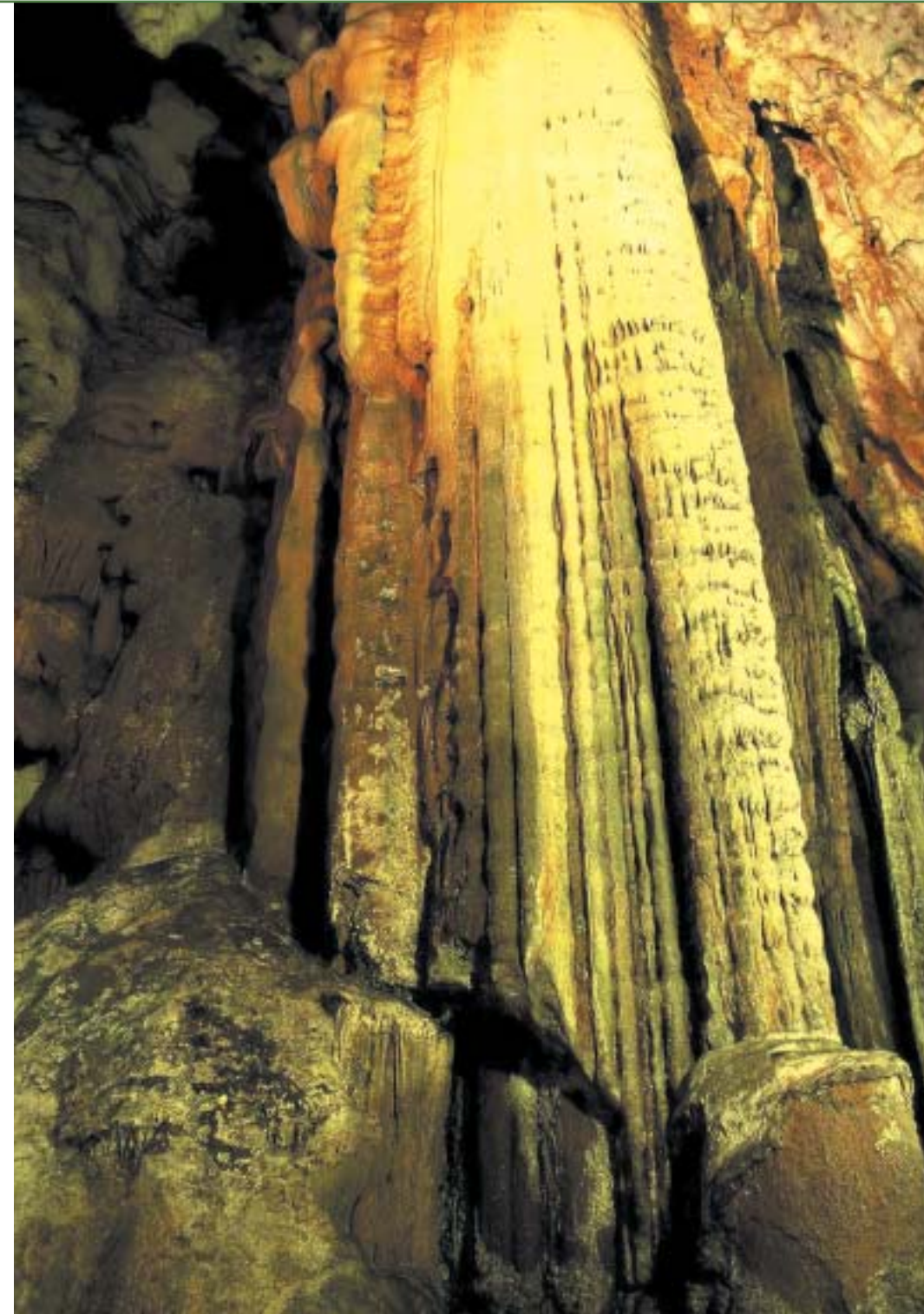
クレーターのような凹地）、ウパーレ（ドリーネが二つ以上くっついた谷状地形）、ポリエ（ウパーレがさらに大きくならした平野）といった地形ができ、地下には石灰岩の洞窟である鍾乳洞ができるのだ。

七十万年前に誕生した 巨大な秋芳洞

秋吉台は今から三億年前は南太平洋に見られる美しいサンゴ礁であった。しかし、その後の地殻変動によって海中にあったサンゴ礁は陸地となり、秋吉台が誕生した。秋吉台を造っている岩は秋吉石灰岩と呼ばれているが、その中にはサンゴやフスリナ、アンモナイトといった生物の化石が含まれている。しかも、その生物は南太平洋のサンゴ礁を特徴づける生物であることから、秋吉台はかつてサンゴ礁だったと考えられているのだ。秋吉サンゴ礁では、さまざまな生物たちが進化しながら死んで堆積し、その厚さは一〇〇〇メートル

その後、秋吉台には多くの動物がすむようになった。七十万年前には鍾乳洞が誕生したとされている。秋吉台上に降った雨水は、地殻変動などで生じた割れ目に沿いながら地下に染み込んでいった。この時、雨水に含まれている酸によって石灰岩の割れ目は少しずつ溶かされて水路となり、次第に大きくなっていった。

また、地下水位が低くなるにつれて洞窟は下へ下へと溶かされ、やがて大きな洞窟となっていた。そして、天井や壁、床面などに鍾乳石や石灰華、石筍などの二次生成物ができ始める。こうして形成された巨大な鍾乳洞が



秋芳洞のシンボルともなっている、高さ約15mの巨大な黄金柱

（明治三十八）年には英国人のエドワード・ガントレット氏によって洞窟内の探検や調査が行われ、国内外に広く紹介された。

また、瀧穴は一九二二（大正十二）年に国の天然記念物（現在は特別天然記念物）に指定され、一九二六（大正十五）年には現地を見学された皇太子（昭和天皇）によって瀧穴から秋芳洞へ

と改名された。

宮殿のように美しい、 秋芳洞の二次生成物

秋芳洞の特徴は二次生成物の豊かさで、その光景は「まるで宮殿のような美しさ」とも評されている。秋吉台に降った雨水は石灰岩を溶かしながら割れ目を通して、洞窟の天井

に染みだしてくる。天井に染みだした雨水は石灰分と炭酸ガスを含んでいるが、空気に触れることで炭酸ガスは空気中に逃げ、溶けていた石灰分だけが天井に付着して残る。この石灰分が積み重なって天井から垂れ下がっているのが鍾乳石で、ストローのような管状鍾乳石やカーテンのような幕状鍾乳石などがある。

秋芳洞で、全長は約八七九〇メートルにもおよぶ。秋芳洞は秋吉台の南側の広谷ポリエの奥にぼっかり口を開けている。洞窟内に入ると幅は約四〇メートル、高さは約二〇メートルの青天井と呼ばれる空間が広がる。見学できる長さは約一〇〇〇メートルもある。

秋芳洞が地元の人たちによって発見されたのは約六百年前で、当時は「瀧穴」と呼ばれていた。その後、一九〇五



石灰分が壁に付着した石灰華段丘の百枚皿

一方、天井で固まりきれなかった石灰分が形作るのが石灰華と石筍である。石灰華は雨水と一緒に壁面をたどった石灰分がやがて壁に付着してできたもので、石筍は石灰分が雨水と一緒に床面に落ちて床に付着し、まるでタケノコのように下から上へと伸びたものである。

バラエティに富む 四百四十の洞窟

秋吉台には秋芳洞をはじめ、景清六、大正洞など大小さまざまな洞窟が四百四十も発見されており、その形も横に長いトンネル状のものや縦に深い井戸状のもの、斜めに伸びる斜洞、階段状のものなどバラエティに富んでいる。

また、こうした秋吉台や地下に広がる洞窟は、山口県民だけでなく人類にとっても貴重な「財産」である。それを守るために、戦後、米軍から秋吉台を爆撃演習地にしたという申し出がなされた時、地元の人たちだけがなく多くの山口県民は反対運動を展開し、学術的にも貴重な秋吉台を守ってきた。

秋吉台と、その地下に広がる秋芳洞は、そうした地元の人たちの思いを知っているかのよう、今日も輝き続けている。

磐窟溪・磐窟洞

《岡山県高梁市》

奇峰が天を突き抜ける

新緑に抱かれて、約一〇〇メートルにもおよぶ白亜の岩壁がそそり立つ。継子岳、白岳、神楽岳、打岳、岬鼻がらなる高梁市川上町の磐窟溪だ。

磐窟溪は、磐窟川が石灰岩と角石の断層で造られた台地を深く浸食して、V字谷を形成したものだ。川上町の町史では「奇峰天に柱する」と表現されているが、まさに天を突き抜けるような

断崖である。磐窟溪のある川上町が「地質学の宝庫」と呼ばれているのも納得できる景観だ。

磐窟溪は、新緑や紅葉の季節はもちろん、四季折々に見せる景色は抜群の美しさを誇り、一九三二（昭和六）年には国の名勝に指定されている。生い茂る植物は、暖地性、湿地性、温地性、亜熱帯性に加えて石灰岩地帯特有の植物もあり、品種が多いことも大きな特徴となっている。



白亜の岩壁がそそりたつ磐窟溪

磐窟洞の二次生成物

磐窟溪の中腹、海拔約三五〇メートルのところに鐘乳洞の磐窟洞がある。磐窟洞は、日本でも珍しい、出入り口が一方にしかない閉塞型断層鍾乳洞で、鍾乳洞の形成を示す断層が垂直な一枚板のように洞の中央を一直線に走っている。

当初、磐窟洞の奥行きは約六〇メートルと考えられていたが、一九六六（昭和四十一）年に人工掘削したところ、さらに約三〇〇メートルの大鍾乳洞が発見された。磐窟洞の中には美しい鍾乳石や石筍といった二次生成物が数多くあり、別名「ダイヤモンドケープ」とも呼ばれている。

ダイヤモンドケープの異名は、内部の鍾乳石は方解石の結晶が大きく、まるでガラス細工のように透明であることから名付けられたもので、洞内は冷気ともいえるほどの涼感が満ちている。

七十万年の歳月による日本一高い石筍

磐窟洞の中でも、特に有名なのが石筍やヘリクタイト、石灰華段だ。石筍は天井から落下する、石灰岩を含んだ水滴を受けて上に向かって伸びている石だが、磐窟洞の石筍の高さは二メートル三センチで、日本一を誇っている。これ



ダイヤモンドのように輝く磐窟洞の内部

だけの高さになるには七十万年の歳月を要するとされている。

また、「曲がり石」とも呼ばれているヘリクタイトは、重力とは無関係に、洞窟の天井や床のあらゆる方向に曲がりくねって伸びる太さ二五ミリの生成物だ。その様はまるでモヤシのようである。磐窟洞のヘリクタイトは、大きさ、数量とも日本随一といわれている。

さらに、池の周辺に石灰岩が沈着して畦（あぜ）のような石灰華段、カーテン状やクラゲ状など変化に富んだ流れ石など、磐窟洞の内部は見どころに満ちている。

注：磐窟洞は補修整備のため、二〇一〇年度は休洞しています。

若者たちの地域づくり 4

より高いレベルから環境問題に取り組む学生ISO委員会

《鳥取市》

「人と社会と自然との共生」を建学の礎として2001（平成13）年に開学した鳥取市の鳥取環境大学。県と市が設置主体となり、運営は私立の独立形態をとる公設民営方式の大学である。

全国でも数少ない環境問題を教育課題としている大学だけに、ユニークなサークルがある。「学生ISO委員会（学愛）」もその一つである。

「環境問題に対して一般レベル以上の関心を持つと、学生たちの中から自発的に生まれてきたサークルです」。こう説明するのは委員会の代表を務める亀山直也さんだ。

自分たちが環境に何らかの影響を与えているということ



「鳥取市花のまつり」では特設ブースで環境美化活動を呼び掛ける。（写真：中山昇治）

マネジメントシステムの国際規格ISO14001の認証を取得したが、委員会のメンバーも大学の内部環境監査員として、教職員とチームを組んで実施した。

一方、学内での活動も盛んである。ISOの知識向上のために年に2回は学年ごとにレクチャーを行っている。また、学生に廃棄物削減を呼び掛けたり、不要資源の啓発を行ったりするほか、景観通信簿の作成や緑化率の調査なども行っている。

一方、学外での社会貢献活動の取り組みにも積極的である。2008（平成20）年からは春の大型連休に開催される「鳥取市花のまつり」で、日本たばこ産業の「ひろ

えば街が好きになる運動」に協力。メイン街道の特設ブースで清掃活動と環境美化やゴミの分別マナーの向上などを呼び掛けている。

また、全国規模のイベントとなっている「日本列島を軽くしよう～Jump」も欠くことのできないイベントだ。これは2005（平成17）年から始まった活動で、全国12大学と連携。それぞれの街で収集したゴミを持って正午に一斉にジャンプする。跳び上がることでゴミの重量と、自分た



全国12大学と連携して開催している「日本列島を軽くしよう～Jump」（写真提供：学生ISO委員会）

ちの体重の分だけ日本列島が軽くなるという「清掃イベント」である。

「さらに、産官学の研究交流会への参画や高校での環境教育、東京で開かれる日本最大級の総合環境展『エコプロダクツ』への出展なども行っています」と、亀山代表。大学で学ぶだけでなく、地域社会でも環境問題に取り組もうという学生ISO委員会の活動の幅はますます広がっていきそうだ。

（文・中山昇治・鳥取市在住）

地域に徹した番組づくりで地域に貢献する



萩ケーブルネットワーク株式会社 社長

刀 彌 勇

《山口県萩市》

企業活動を通じて 地域を活性化する

決断を迫られていた。この事業は地域に必要な事業であり、事業を進めるためには地域ぐるみで取り組むことが必要だ。そのことを多くの人たちに説き、多くの地元企業から支援の声を得ていた。しかし、核となるべき組織の意思決定は遅々として進まず、時間が過ぎ去るばかりだった。

とつすべきか。黙考する企業家の脳裏にふと、師と仰ぐ杉道助氏（故人）の言葉が浮かんできた。「政治に行くなら最初から政治へ、経済に行くなら最初から経済へ行きなよ」。それだけの言葉であつたが、忠告ともいえる言葉を聞いた時、大学生だった若者は経済の世界で生きていくことを決意した。杉氏は大阪商工会議所の会頭として、戦後、大阪の経済復興に大きな役割を果たした人物で、企業家と同じ高校の先輩でもあった。

それから数十年の歳月を経て、若者は地元を代表する経済人に成長していた。その間、常に思いつけていたのは企業活動を通じて地域を活性化することである。それは、経済の世界を選択した自分にとっては当然のことだった。

「そこで決断したが、賛同してくれる仲間と一緒に事業を立ち上げることでし

た。そのことを仲間に伝えると、『よし、やろう』と言ってくれました」

こう語ると、企業家は目を細めながら笑顔を浮かべた。山口県萩市の萩ケーブルネットワーク株式会社の刀彌勇社長（70歳）である。萩商工会議所会頭や山口経済同友会副代表幹事といった要職も務めているため日々の日程は多忙を極めていたが、その表情はエネルギーに溢れていた。

悩むことなく「ものづくり」の 世界に飛び込む

刀彌社長は一九四〇（昭和十五）年に萩市で生まれた。実家は古くからの米屋で、刀彌社長は高校を卒業すると、大阪の大学に進学した。学部は工学部だった。

当時の日本は戦災復興から経済成長へと急ピッチで向かっていた時代で、経済成長への期待と夢、そして希望が列島を包み込んでいた。そうした時代の「空気」のなかで、理数系が好きだった刀彌社長も悩むことなく技術畑を選択した。

大学では発酵工学科を専攻した。他大学では応用化学科であるが、近くに日本を代表する醸造地があるためである。刀彌社長が発酵工学科を専攻したのは、刀彌社長が発酵工学科を専攻したのには訳があつた。

「急成長していた洋酒メーカーに就職し

たかつたんです。給与も高かつたし、お酒も好きでしたからね」。こう語ると刀彌社長は大きな声で笑った。

しかし、そのメーカーへの就職はかなわなかつた。大学時代の一時期、刀彌社長は書生代わりとして杉氏の自宅で生活していた。杉氏は吉田松陰のおいで、高校の先輩でもあった。刀彌社長は杉氏から別の洋酒メーカーを紹介されたが、自分の希望と折り合わず、結局異分野の食品メーカーに就職した。

毎年、アイスクリームの ヒット商品を開発

食品メーカーのメイン商品の一つであるアイスクリームの研究室に配属された刀彌社長はアイスクリームの商品開発を担当した。

「毎年、四、五点の新商品売り出すのですが、私は毎年ヒット商品を開発し、特に抹茶とピラをブレンドしたアイスクリームは日本初です」と、刀彌社長は語る。お酒が好きで、大学時代には研究室のフラスコで酒を醸造していたという刀彌社長からは想像できないようなエピソードだ。

刀彌社長はアイスクリームの開発で大きな成果を挙げ、社長から金一封をもらつたこともある。月給の半年分にあたるほどの金一封だった。

profile

刀 彌 勇 とねいむ

1940年萩市生まれ。大学を卒業後、食品メーカーを経て、萩市に帰郷。極東ガス燃料社長などを経て、85年に萩ケーブルネットワークを設立。萩ケーブルネットワークは、資本金は2億円、従業員数は45名、売上高は8億円である。

文：城市 創（島根県益田市出身） 写真：村上征雄（山口県防府市在住）



放送番組を背にCATVのビジョンを語る刀禰社長

「CATVの将来を考えると、いかに地域に徹するか、それが生命線だと考えました。そこで、他のCATV局とは逆に、制作スタッフを充実させました。良い自主番組を作れば、強い営業力になると判断したのです」

その理念は開局から四半世紀を経て変わっておらず、現在では社内二つのスタジオを設けて生放送もしている。また、合併前には近接する各町の独自番組を制作し、合併しなかつた町でも独自番組を継続している。

「独自番組を制作するためには、それなりのコストは掛かります。しかし、地元の人たちが本当に愛してくるCATVになるためには不可欠なことです。事業としても成り立ちます。実際、地域がよくなるという加入者は増

の多いプロパンガスとはいえ、大規模な設備投資をしたからには販売量を拡大することが必要だ。

大きな力となつたのがプロパンガスの質である。プロパンガスはプロパンとブタンを主成分としており、販売するにはプロパンの純度で区分けされたランクを示す必要があつた。そこで、大手商社との供給関係を構築した極東ガス燃料は純度の高いプロパンガスを販売することにした。

「純度が高いのですから、当然、仕入価格も高くなつてきます。それでも、質の高いことを強調しながら、他社と同じ価格で販売しました。良質なガスを販売すれば、消費者は必ず分かつてくれるし、販売量も拡大できると確信していたからです」

良質な商品、高いサービスこそが競争力の源泉であるという理念。それを貫くことで、極東ガス燃料は着実に成長し、萩市を中心とした多くの人たちの快適な生活を支えていった。



地元産の孟宗竹を使った家具製品は世界的にも高く評価されている。

ある同軸ケーブルを効率的に敷設するため、これから住宅開発が進みそうな地域などを考慮しながら敷設の基本設計や図面作成なども自分たちで行った。

その時に刀禰社長が重視したのは、地域のコミュニティ情報を地域の人たちに伝える自主番組だった。当時、多くのCATV局では多チャンネルによって放映できる番組数を最優先する傾向にあつた。しかし、刀禰社長は地域ならではの番組制作こそCATVの大きな役割だと判断したのだ。

加していますし、小さなエリアではありませんが、利益も上がっています」

こうした理念が高く評価されて、来年四月には隣接する島根県益田市でもCATV局を開局する。

地域資源を生かし、グローバルに連携する

地域経済の活性化に貢献したいという刀禰社長の思いはCATVにとどまることはなかつた。二〇〇六(平成十八)年には、地元孟宗竹を生かそうと、地元の企業と一緒にタケ・クリエイト・ハキ株式会社を設立し、孟宗竹を使った家具の生産・販売を行っている。

山口県は全国でもトップクラスの竹の生産地で、とりわけ萩の孟宗竹は世界に誇れる品質を有している。その孟宗竹と、高級家具の産地として知られる北欧のデザイン力をコラボレーションさせて、付加価値の高い製品を開発しようと考えたのだ。

既存メディアに替わってキャプションシステムやパソコン通信、CATVといったコミュニケーションが注目されるようになったのだ。CATVは、電波ではなくケーブルで伝送するテレビ放送で、地域を対象とした番組も提供できるものだ。

「これからはインターネットの時代だと騒がれ、私もかなり勉強しました。そこで得たのは、人口五、六万人の萩市が取り組むとしたら、双方方向のコミュニケーションができて、医療分野での利用も可能なCATVだということです。といても、取り組むには地域が一つにまとまる必要があります。そこで、さまざまな人たちにCATVを説明し、一緒に取り組もうと呼び掛けたのです」

刀禰社長は一生懸命に説明したが、地域の核となる組織は意思を決定しなかつた。そこで一大決断をして、中国地域では初となる都市型CATVである萩ケーブルネットワークを仲間たちと設立したのだ。一九八五(昭和六十)年のことだ。



本社内のスタジオでは生放送も行っている。(写真提供:萩ケーブルネットワーク)

「一晩で使い切ると、研究室のメンバーと飲み屋街に繰り出したのですが、いつも安い飲み屋ばかり使っているものから、結局、一晩では使い切れませんでした」

こんな楽しい思い出もある食品メーカーであったが、刀禰社長は四年後には退職した。えこひいきがあまりにもひどすぎるため、上司に「鉄つい」を食らわせてしまったのだ。社長をはじめとして慰留はあつたが、退職の意思は変わらなかつた。

良質な商品、高いサービスこそ競争力の源泉

萩市に帰郷した刀禰社長は、家業を継ぐとともに、新しい事業としてプロパンガスの供給事業を始めた。

当時はまきや木炭に替わってプロパンガスがかなり普及していたが、供給設備は小さく、五十キロのボンベから十キロのボンベにプロパンガスを充填していた。それを見た刀禰社長は、設備投資をすれば充填効率は向上するし、利用者の利便性も高まると判断した。

そこで、同業者と一緒に極東ガス燃料株式会社を設立し、JR萩駅に三十トンのストレージタンクを設置した。貨車一両のプロパンガス二十トンを充填できるようにしたのだ。しかし、いかに成長性

の低いプロパンガスと違い、大規模な設備投資をしたからには販売量を拡大することが必要だ。

大きな力となつたのがプロパンガスの質である。プロパンガスはプロパンとブタンを主成分としており、販売するにはプロパンの純度で区分けされたランクを示す必要があつた。そこで、大手商社との供給関係を構築した極東ガス燃料は純度の高いプロパンガスを販売することにした。

「純度が高いのですから、当然、仕入価格も高くなつてきます。それでも、質の高いことを強調しながら、他社と同じ価格で販売しました。良質なガスを販売すれば、消費者は必ず分かつてくれるし、販売量も拡大できると確信していたからです」

良質な商品、高いサービスこそが競争力の源泉であるという理念。それを貫くことで、極東ガス燃料は着実に成長し、萩市を中心とした多くの人たちの快適な生活を支えていった。

中国地域初の都市型CATVを開局

その後も刀禰社長はいくつかの事業を立ち上げ、地域経済の活性化に貢献してきたが、一九八〇年代を迎えて、特に注目したのがコンピュータだ。科学技術の発展に伴い、新聞やテレビといった

地域ならではの番組制作こそCATVの役割

会社を設立しても、CATVの経験者など一人もいなかった。そこで、長野県や山梨県の先進地を視察し勉強を重ねていった。CATVの基本インフラで

県内企業が連携して、 スギやヒノキの樹皮を活用した 環境緑化ボードを開発

〈鳥取市〉

日本に多く植生しているながら廃棄されているスギやヒノキの樹皮。それを特殊加工した「E-ソイル」を活用して壁面緑化を推進するため、県内企業はそれぞれの技術を生かしながら環境緑化ボードを開発し、新しい市場を開拓しようとしている。



E-ソイル・ボードを使った壁面で生育する植物

たジャパン緑化はE-ソイルと大林式工法を普及するために設立された会社で、全国で導入実績を上げていった。

「E-ソイル」を活用した 壁面緑化に挑戦

「E-ソイルは屋上緑化を中心に反響は大きかったのですが、その一方で、将来的に壁面緑化に使えないかと考えたのです」。こう語るのはジャパン緑化の小林清社長である。E-ソイルを壁面に張り、そこに植物を植えれば、環境に優しいだけでなく、景観の向上にも寄与できるのではないかと考えたのだ。

しかし、壁面緑化に使用するためには、なによりも粉碎状態にあるE-ソイルを固形化して持ち運びや扱いを簡単にすることが必要だ。そこで考えたのがE-ソイルのボード化だった。

小林社長はさっそく国の支援事業に手を挙げたが、最初は認定されなかった。「イメージでしかなく、事業化の道筋が明確でなかったのです。良い勉強でした」



E-ソイルを使った兵庫県立三木総合防災公園のビーンズドーム

と、小林社長。その経験を踏まえて、小林社長は製品化に向けた研究開発を進めるとともに、販路開拓などの検討も行っていった。

その過程では、中小企業基盤整備機構や商工会などからアドバイスを受けるとともに、製品化や販路開拓などの方向性を徹底的に議論し合った。「それを繰り返すことで、事業化の具体性がく

天然素材として注目される 「E-ソイル・ボード」

地球環境の保全、とりわけヒートアイランド現象の対策として都市部を中心に屋上緑化や壁面緑化が着実に進んでいる。屋上緑化とは建築物の断熱性や景観の向上などを目的としてビルの屋上などに植物を植えて緑化することで、壁面緑化とは建物の外壁を緑化することである。

屋上緑化は、基本的に屋上が平面であるため、植物を植えることは比較的に容易である。その一方で、壁面緑化は、基本的に壁面が垂直であるため、工法やメンテナンスなどにおいて技術的な課題も多い。

そうしたなかで、日本に多く植生しているスギやヒノキの樹皮を特殊加工してボード化した天然素材が建築業界を

と高まったと思います」と、小林社長は言葉をつないだ。

県内企業との

新連携事業で研究開発

小林社長が研究開発で特に注力したのはボードの形状維持だった。市場に出回っていた緑化用ボードには植物に水を与えることや時間の経過によつて崩れやすいという問題があった。それを解決するために時間をかけて繊維質の接合剤を選択し、その結果、人や環境に害のない接合剤と出合うことができた。

接合剤が確定すると、次の課題はボード化の技術とボードに植物の苗を植える技術だった。ボード化は中小企業基盤整備機構の紹介で豊富なノウハウを有しているフジ化成工業と連携することになったが、植物の苗を植える技術の協



多種類の苗を植えられるE-ソイル・ボード

力先はなかなか見つからなかった。そこで、小林社長はインターネットなどで検索しながら全国を駆け巡った。

その結果、市内の竹本園が技術を有していることを先人たちは知っていたからだ。そこで、大林会長は針葉樹皮を環境に優しい価値ある資源として見直し、リサイクルして土壌改良資材「E-ソイル」を開発・製造するとともに、独自の環境保全型工法「大林式工法」を開発した。二〇〇〇（平成十二）年に創業していることを知った。竹本園は、造園業者などに多品種の苗を提供している企業で、ホームセンターなどで販売されているポット苗の前段階のプラグ苗を生産していた。竹本園に相談すると、ボードに穴を開けてプラグ苗を植え付ける工法を提案された。

ジャパン緑化は事業の可能性が明らかになった時点で新連携事業を申請し、二〇〇七（平成十九）年には認定を受けていたが、ボード製造技術と種苗生産技術が新たに加わることで商品化がより具体的になってきた。

緑化だけでなくバイオレン性も 高い環境緑化ボード

開発されたE-ソイル・ボードは、保水性や植物育成に優れるだけでなく、脱臭力や断熱性も高く、さらに多種類の苗を植えることで壁面のデザイン性を高めることもできる。

「本格的な販売はこれからですが、将来的にはビルの壁面だけでなく、インテリアや癒やしグッズなどにも活用していきたいと考えています」と、小林社長は抱負を語った。

厄介者扱いされてきた樹皮は、企業の連携によって地球環境に貢献する素材に生まれ変わるとともに、人々に癒やしを提供する空間も創出しつつとしている。

中心に注目を集めている。鳥取市の株式会社ジャパン緑化が「異分野連携新事業分野開拓（新連携事業）」として、県内のフジ化成工業株式会社（伯耆町）、有限会社竹本園（鳥取市）と連携して開発した環境緑化ボード「E-ソイル・ボード」である。

スギやヒノキの樹皮を 活用した「E-ソイル」を開発

新連携事業のシーズはジャパン緑化の会長である大林久氏が開発した「E-ソイル」である。大林会長は、山地に放置されるか、産業廃棄物として焼却されていたスギやヒノキの樹皮に着目した。とかく厄介者扱いされる樹皮であるが、広島県の厳島神社や香川県の金刀比羅宮などの屋根にはヒノキの皮が使われている。それは、ヒノキの皮は長期間繊維状態を保ち、腐敗しないという特性があることを先人たちは知っていたからだ。

そこで、大林会長は針葉樹皮を環境に優しい価値ある資源として見直し、リサイクルして土壌改良資材「E-ソイル」を開発・製造するとともに、独自の環境保全型工法「大林式工法」を開発した。二〇〇〇（平成十二）年に創業していることを知った。竹本園は、造園業者などに多品種の苗を提供している企業で、ホームセンターなどで販売されているポット苗の前段階のプラグ苗を生産していた。竹本園に相談すると、ボードに穴を開けてプラグ苗を植え付ける工法を提案された。

ジャパン緑化は事業の可能性が明らかになった時点で新連携事業を申請し、二〇〇七（平成十九）年には認定を受けていたが、ボード製造技術と種苗生産技術が新たに加わることで商品化がより具体的になってきた。

緑化だけでなくバイオレン性も 高い環境緑化ボード

開発されたE-ソイル・ボードは、保水性や植物育成に優れるだけでなく、脱臭力や断熱性も高く、さらに多種類の苗を植えることで壁面のデザイン性を高めることもできる。

「本格的な販売はこれからですが、将来的にはビルの壁面だけでなく、インテリアや癒やしグッズなどにも活用していきたいと考えています」と、小林社長は抱負を語った。

厄介者扱いされてきた樹皮は、企業の連携によって地球環境に貢献する素材に生まれ変わるとともに、人々に癒やしを提供する空間も創出しつつとしている。

ヒト細胞の体外培養技術を応用して 医療の高度化をサポートするフェニックスバイオ

〈広島県東広島市〉

高度な医療技術の開発などで大きな成長が期待される生命科学。組織再生プロジェクトの実用化を目指すフェニックスバイオは、ヒト細胞を実験動物に移植する技術などで医療技術の高度化をサポートしている。

組織再生プロジェクトを事業化

二十一世紀を迎えて、遺伝子医療、再生医療といった高度な医療技術や医薬品開発技術を実用化しようという動きが活発になっている。そうしたなかで、ヒト細胞を実験動物に移植する技術により、ヒト細胞の機能をさまざまな用途に利用しやすくする事業で世界の医薬品メーカーなどから注目されている企業がある。広島県東広島市の広島中央サイエンスパークに本社がある株式会社フェニックスバイオだ。

マウスの肝細胞をヒトの肝細胞と置換

フェニックスバイオは二〇〇二（平成十四）年に、広島大学の吉里名誉教授が長年にわたって取り組んできたプロジェクトを事業化するために設立された。吉里教授は、一九九二（平成四）年から十年間にわたって、広島で組織再生研究のプロジェクトを立ち

上げた、マウスにヒトの肝細胞を作らせるキメラマウスの技術や脱毛医療のための毛髪再生技術など数多くの成果を生み出してきた。こうしたプロジェクトのなかで、フェニックスバイオが事業化に取り組んでいるのがPXBマウス（ヒト肝細胞キメラマウス）事業と遺伝子改変動物事業、毛髪再生事業である。特に、PXBマウス事業は新薬の開発に取り組んでいる世界の医薬品メーカーから注目されている。

常なヒト肝細胞に置換する技術を開発したのだ。

しかも、肝細胞を置換したPXBマウスの肝臓は正常な組織構造を示し、マウスの肝臓として正常に機能している。

新薬開発で大きな成果を期待

PXBマウスによって大きな成果が期待されるのは新薬の研究開発である。安全な新薬を開発するために、医薬品メーカーは長い歳月と多額な資金を投入している。そこで重要な役割を担っているのが実験動物や臓器などを利用した実験である。しかし、動物実験で良い成果が出たとしても、臨床実験では十分な成果を得られず、開発そのものがストップするケースも多い。いかに、動物実験での精度を上げるかが研究開発の大きな課題である。

その点においてPXBマウスは大きな役割を担うことができる。肝臓の重要な機能は体内に入ってきたものを受け入れるようにする代謝機能で、受け入れられないものは毒として体外に排出する。したがって、開発した新薬が肝臓で正常に代謝されるかどうかを確認することが必要である。

PXBマウスの肝細胞はヒトの肝細胞に置換されているため、開発した新

薬を投与することでヒトの肝細胞がどのように反応するかを確認することができる。言い換えれば、ヒトの肝細胞が生きている状態で新薬への反応を確認することができるのだ。フェニックスバイオはこうしたPXBマウスを用いた医薬品試験サービスを世界の医薬品メーカーから受託し、新薬開発に大きく貢献している。

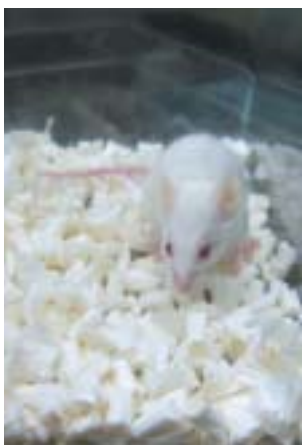
肝炎ウイルスの新薬開発にも大きな期待

PXBマウスを利用したもう一つの試験サービスが肝炎ウイルスの研究である。B型肝炎ウイルスやC型肝炎ウイルスは人間に特異的なもので、チンパンジー以外の動物には感染しない。「ところが、PXBマウスは肝臓内に正常なヒト肝細胞を持っているため、肝炎ウイルスを持続的に感染させることができます。つまり、ウイルスに感染したPXBマウスの肝臓を感染マテリアルにすれば、細胞が生きている状態でウイルスの増減を確認することができると、」と、蔵本社長。

肝炎ウイルスについては、インターフェロンなどが治療に使われているが、より効果の高い治療薬が求められている。そこでPXBマウスを利用すれば、抗ウイルス剤の薬効試験やウイルス複製

置換させたものです。この説明してくれたのはフェニックスバイオの蔵本健二社長である。免疫不全で、かつ肝障害があるマウ

スにヒトの細胞を移植する方法はすでに海外で研究されていたが、吉里名誉教授の研究グループはそれをベースにマウスの肝細胞の七〇〜九〇%以上を正



高度な医療技術の開発を支えるマウス

効率の比較試験、ウイルス感染防御試験などを行うことができ、肝炎ウイルスをターゲットとした新薬開発の可能性も高まると期待されている。

成長が期待される生命科学を最先端でリード

こうしたPXBマウス以外にもフェニックスバイオは新しい医療技術に取り組んでいる。それが遺伝子改変動物事業と毛髪再生事業だ。

遺伝子改変動物事業は、マウスやラットなどを使って病体モデルを作製し、医療技術の向上をサポートするものだ。急速に進むゲノム解析によって、外的要因を除けば人間の疾患の九〇%は遺伝子によるものとされている。

「このことは、遺伝子を改変すれば発病を排除することも可能ということだ。例えば、マウスの中にガンの遺伝子を移入して病体モデルを作成すれば、

その発現化を研究することができます」と、蔵本社長。それが遺伝子改変動物事業だ。

一方、毛髪再生事業は、自分の毛乳頭細胞を患部に移植して新しい毛包を作るものだ。毛包は毛穴の奥で毛根を包んでいるところである。毛髪再生では、自分の毛包を植える「自毛移植」が一般的であるが、フェニックスバイオが取り組んでいるのは毛乳頭細胞そのものを体外で増やして移植するもので、毛髪再生としては画期的な療法として注目されている。

生物が元来持っている機能の解析や活用によって、これまでにない医療技術や医薬品開発を実用化しようというフェニックスバイオは、大きな成長が期待される生命科学を最先端でリードしている。



広島中央サイエンスパーク内の本社ビル

特産の帆布を通して尾道を 「人と人とのふれあいの街」へと 進化させていく木織雅子さん

昭和初期の織り機が並ぶ工場見学が帆布との出会いだった。レトロな魅力に心を動かされ、帆布を尾道の新たな特産品にする活動を開始したのが十年前のこと。今では「尾道帆布展」や「立花テキスタイル研究所」の設立など、その活動範囲はますます広がっている。



profile

木織雅子 きおりまさこ

1939年生まれ。広島県尾道市出身。NPO法人工房おのみち帆布理事長。保育士をしながら2人の子どもを育てていたが、夫が脱サラして会社経営を始めたため手伝うことに。その後、尾道大学の学生食堂を運営したことが尾道の人脈づくりになったという。尾道をもっと元気にし、ゆくゆくは国際交流もしたいとの夢を抱いている。

文・藤沢享乃（広島市在住） 写真・平本勝美（広島県福山市在住）

海の香りのする尾道帆布

かつて海上交通の要衝で、江戸時代は北前船の寄港地だった尾道は、帆布産業が盛んだった。帆布は文字通り、帆船用の布で「丈夫な布」であることから、テントやシート、作業服などにも使用され、五十年前の尾道には帆布工場が十社あったという。ところが昭和三十年代、安くて軽い合成繊維が主流になるにつれて帆布の需要は減少し、市内に残った工場はわずかに一社のみとなってしまった。

「NPO法人工房おのみち帆布」理事長の木織雅子さん自身、十年前に対岸の向島の帆布工場を広島県中小企業家同友会尾道支部女性部の活動で見学するまではそれほど関心はなかったという。ところが、工場内を一目見て「まるで『鶴の恩返し』の世界のよう」と心を動かされた。そこには昭和初期の織り機やていねいに紡がれた真っ白な糸と木製ボビンなどが、どこか寂しげに置かれていた。

を生かすために必ず手作りにすることにし、また北前船のシルサトをモデルにしたタグで、潮の香りのする尾道らしさをアピールした。

「尾道特産の食べ物たくさんありますが、お土産として持って帰れてずっと使えるといったものはありませんでした。だから、尾道で織られた帆布で、尾道で手作りした小物があれば、尾道をずっと思い出してもらえないかな」と思ったのです。と、木織さんは工房おのみち帆布設立の経緯を説明してくれた。

映画の街としても全国的に有名な尾道を訪れる観光客は年間五百万人。一度尾道を訪れると、その魅力の虜になり再びやってくる人も多い。そんな人をもっと増やすためにも尾道らしい記念品が欲しかったのだという。

美大生との出会いから 生まれた「尾道帆布展」

クリーニング店の片隅で一台のミシンから始まったおのみち帆布は、地元商店街の協力もあり、少しずつ売れ始め商品の種類も増えていった。そんな時、木織さんが出会うのが尾道を旅行していた美大生・新里力オリエさんである。

関東出身の新里さんにとって、海と

山に囲まれた昔ながらの商都は新鮮だった。ここには自然と歴史と人情と狭い路地がある。まさに創作意欲をかきたてる空間だと感じた。

そんな感想を新里さんが木織さんに何気なく話したことから企画されたのが「尾道帆布展」だ。これは、美大生たちを一カ月間尾道に招待して、帆布を使って創作活動してもらおうというもの。一カ月間住居とアトリエは提供するものの、金銭支給はない。純粋に尾道で帆布作品をつくってみたいという人だけに参加してもらった。

しかも、アトリエは空き店舗や廃校だから、創作活動中にふらりとやってくる尾道市民や旅行者も多い。なかには毎日やってきて声を掛けていくおじいさんもいた。

芸術家といえば気難しいもの。創作活動中に他人に見学されることは何より嫌なのではないだろうか？ そんな疑問をぶつけてみると、「創作活動を公開するという条件に同意してもらった人だけに参加していただきました」と、新里さん。帆布の魅力はその素朴さにあるから、完成した作品だけを見て近寄りたいたいアートだという印象を与え

たくなかったのだという。身近な帆布が芸術家の手を借りればアートにもなるという「可能性の面

は



尾道での出会いを大切にはぐくんできた木織さんと新里さん（左）

白さ」をみんなに分かってほしかったので、あえて創作活動を公開することを条件にした。もちろん尾道帆布としてのPRという効果を狙った面もあるが、帆布と創作者、尾道という街、そして創作中にそこに立ち寄った人々（市民も旅行者も！）が絡み合うてできた作品ということに意味があると思う。

廃校になった小学校で、二〇〇〇（平成十二）年に第一回尾道帆布展が開催されると大評判となり、以後、毎年開催されている（二〇〇九年から隔年開催へ変更）。

資料館・作業場を兼ねた オープンな店舗

二〇〇四（平成十六）年、商店街の元家具店店舗を借り、工場で使用していた本物の織りの道具などを展示する資料館と作業場を兼ねた「工房おのみち帆布」の販売店を開いた。

年間二万人の来客があり、二階はギャラリーとして般利用もできる。ガラス越しに見える作業場では数人の女性がミシンをかけたリ布を裁断しており、工房というよりは、どこか家で内職する母の姿のようで、ほのぼのとした温かさが伝わってくる。手作りなので、ポケットをつけてほしいとか左フアスナーにしてほしいといった個別注文にも応えてくれる。

一方、オブジェのような独特の雰囲気や放つ織り機の周りでは、観光客が記念写真を撮っていく。尾道にはこんな隠れた魅力もあると気づいてほしい、木織さんがわざわざ工場から移したものだ。

尾道をオーガニックコットンと 草木染めの街に！

工房おのみち帆布の売上は年々右肩上がり、店舗やネットでの通信販売のほか、尾道市や広島大学などのイベ

ントの記念品としての注文も多い。二〇〇三（平成十五）年にNPO法人にしたこともあり、木織さんとしては赤字では困るが、これ以上は利益を追求しない方針だ。というのも、「ここまでするのに、店主の方々から多くの援助をしていただきました。だから、帆布での利益は尾道に貢献できる活動に使うつもり」だからだ。

その活動の一環として木織さんが現在手掛けているのが、尾道をオーガニックコットンの街にするプロジェクトと立花テキスタイル研究所の活動である。

オーガニックコットンプロジェクトでは、市民に綿の種を配り植えてもらい、収穫した綿と帆布のコスターとを交換している。また綿の木を植えてくれた小学校には、お礼として綿から糸を紡



店内に並べられた商品はすべて地元の人たちの手づくりだ。

ぐといった出張授業を行っている。このような地道な活動を通して、尾道全体を綿の木でいっぱいにするのが目標だ。

立花テキスタイル研究所は尾道の植物を染料にした商品開発をしている。草木染めの染料の大半は輸入したもので、国内の染料を使用している商品は少ない。尾道産の綿にこだわるならば染料も尾道産にこだわろうというわけだ。

尾道には優良な染料になりそうな植物が多く、例えば、シルクをアカメガシワで染めると漆黒になる。自然染料では茶色にはなっても漆黒の色が出せるのは非常に珍しい。ビワの木を使っても、関東のビワとは微妙に違った色合いになる。国産のキーウィは瀬戸内ならではの染料である。

二年後には立花テキスタイル研究所の独立を目指している。実は、この研究所の所長は尾道帆布展を開催した新里さんだ。新里さんは木織さんの勤めもあり、今では尾道市民となった。新里さんと同じく尾道に「ターンした若者がほかに二人もいる。

新里さんいわく、「染料やオーガニックコットンの研究で向島の人と知り合いになり、毎晩どこかの家に招待されるので食費はほとんどかかりません」。

朝起きると研究所に採れたての野菜が置いてあるといった生活を満喫しているという。

「これからは新里さんのような若い人を後継者として育てていくのが私の仕事です」と、木織さんは言う。たった一枚の帆布がきっかけで、木織さんから新里さん、商店街の人たち、さらには尾道市民へと人の輪がどんどん大きくなっている。



店舗の一角には本物の織り機が展示されている。

オーガニックコットン：有機栽培綿

藤沢享乃 ふじさわ・ゆきの

鹿児島県生まれ。ライター、よつば編集広告事務所代表。大学卒業後、出版社を経て、広島県でフリーライターに。現在は、ライター仲間と設立したよつば編集広告事務所を起点に、地域に根ざした取材記事を執筆している。

「当地」



級グルメ

日生カキお好み焼き

《岡山県備前市日生》

日生地区は古くからの漁師町で、特にカキの一大生産地として知られてきた。その日生の名を一躍有名にしたのが、「当地B級グルメ」の「日生カキお好み焼き」、通称「カキオコ」である。

日生では身近な食材であるカキをさまざまな料理に使っているが、特に相性がピッタリなのがお好み焼きである。冬場、漁師たちが仕事帰りに持ち込んだカキをお好み焼きに入れて焼いてもらったのが始まりという。

そんなカキお好み焼きの魅力を「発見」したのが、JR赤穂線に乗って岡山市に通勤する日生や兵庫県赤穂市の仲間が結成した「日生カキお好み焼き研究会」である。特産のカキをふんだんに使ったお好み焼きの味はもちろんだが、漁師町独特の巨大迷路のような町並みと、そこを散策する楽しさ、見事な日生弁を使いこなし

ながら、「これまた見事な」テラさばきでお好み焼きを焼き上げる「おねえさん（年齢不問）」たちの人情。

漁師町の風情と日生ならではのグルメを楽しむ町として、日本さらには全世界に発信しようという冗談から始まったのが研究会だ。しかし、オリジナルのマップやのぼりを製作するなど、その取り組みは「冗談」ではなく、本格的なまちづくりとなっている。

さて、カキオコの作り方は、山盛りの千切りキャベツにトロトロの生地をサッと混ぜ、パーツと鉄板に広げて焼く。広島風でも大阪風でもない、独特の「日生風」だ。味の特徴を、研究会会長である江端恭臣さんは「外はコンガリ、中はトロトロで、カキがゴロゴロ（入っている）」と表現し、「一口食べるとカキの風味が口中に広がる」と強調する。

研究会は、カキオコを通じて楽しみながらまちづくりを進めることをモットーにしており、「カキオコ合唱団」を結成し、「カキオコソング」まで発表している。日生のカキオコには、カキや風情だけでなく、日生を楽しみたいという人たちの思いもぎゅっしり詰まっている。





藩ものがたり 4

岩国藩

〈山口県岩国市〉

関ヶ原の戦いに大きな影響を及ぼしながら、岩国藩が正式に藩となったのは明治時代を迎える直前である。その間、藩は岩国紙をはじめとする殖産や錦帯橋の創建などに取り組み、明治になると全国に先駆けて学制改革を行い、近代日本の礎を築く人物を輩出していった。



錦川を見下ろして建つ岩国城

幕末まで 藩になれなかった岩国

慶長五（一六〇〇）年、関ヶ原の戦いの際、毛利輝元は西軍の総大将であったが、早くから東軍大将の徳川家康に通じていた従兄弟の吉川広家が毛利軍を動かさず、それが東軍の勝利の一因となった。これには毛利家の本領安堵の密約があったとされているが、戦後、家康は毛利領を没収し、広家に長門・周防の二国を与えようとしたのである。しかし、広家は家康に嘆願してそれを毛利に与えるという妥協案を成立させた。

一見、毛利の危機を救ったように思われる広家の行動であったが、毛利家中では領国が大きく減らされたことへの不満が大きかった。さらに、戦前の和平派と主戦派のしりも残っていた。

結局、広家は岩国三万石（のち六万石）を与えられたものの、吉川家の身分は陪臣とされ、岩国は正式な藩とは認められなかった。

湖志』という書物を広嘉が目にする機会があった。そこに描かれていた島伝いに架かる石橋が、脚のないアーチを並列するという着想のヒントとなった。

これまでの橋は橋脚が折れ崩れて流された。だから脚のない橋にすればよい、というわけである。

錦帯橋はこうして築かれ、優美な姿を今に残している。一九五〇（昭和二十五年）年の台風で流出したことはあったが、三年後に再建。さらに、二〇〇一（平成十三年）年からは、「平成の架け替え」が行われ、二〇〇四（平成十六）年に竣工している。

ちなみに、錦帯橋からも見ることでできる岩国城は一九六二（昭和三十一年）年に再建されたもので、場所も本来の位置とは異なっている。

日本電気界の父を生んだ 岩国学校

岩国藩では養老館という藩校において教育が行われていたが、一八七〇（明治三年）年、政府に先駆け、最後の藩主であり当時知藩事であった吉川経健により学制の改革が行われ、岩国藩学校条例が制定された。

これにより生まれたのが岩国学校で、武士の子弟のみでなく町・農民の子弟も受け入れる学校であった。二年後には外

められなかった。

もともと吉川家は出雲・伯耆などで約十四万石を領していた上、岩国では新たに築城や城下町の建設を行わなければならなかったため、財政は初めから苦しかった。それでも岩国紙の増産・藩専売制の導入により、一時はかなりの利益を得たこともあったが、利益を家格の昇格（諸侯への復帰）工作に用いることも少なくなかった。それは再び財政の悪化へとつながっていたのである。

結局、岩国藩が正式に藩として成立したのは、明治時代を迎える直前の慶応四（一八六八）年に吉川経幹が諸侯（將軍）によって与えられた所領を支配する大名。諸侯の所領が藩である）に列せられてからである。

幕末に諸侯への復帰がなくなったのは、経幹の奔走によるところが大きい。経幹は長州藩主である毛利慶親をよく補佐し、動乱の時代を乗り切るのに功績大であった。吉川家は江戸時代の始まりと終わり、ともに毛利家を救ったのである。

国語学所を併設し、神戸から英国人教師を招いて語学・算術・地理などヨーロッパの学問を学ばせた。

この岩国学校からは近代日本の礎を築いた人物が数多く輩出されるが、中でも特筆されるのが藤岡市助である。市助は安政四（一八五七）年に岩国藩士の子として生まれ、八歳から藩校で学び、十四歳で新設の岩国兵学校に入学、翌年岩国英国語学所に転校するとめきめきと頭角を現した。

その後、工部大学校（現在の東京大学工学部の前身の一つ）電信科に進学。在学中に日本初のアーク灯点灯に参加している。一八八四（明治十七）年には国の使節に任命されて米國に渡り、エジソンの研究室を訪ねたこともある。

市助の功績は、白熱電球の国産化、わが国初の路面電車の走行、国内初のエレベーター設計など、枚挙にいとまがない。後に東芝創業者の一人となる市助は、日本電気界の父といわれている。

岩国学校の校舎は錦帯橋の程近くに残され、県の有形文化財に指定されている。和洋混合のユークな様式で、三階には一八七二（明治五）年に増築された塔屋を載せている。現在は岩国学校教育資料館として活用されており、教科書や藤岡市助に関する資料が展示されている。



県の有形文化財にも指定されている岩国学校

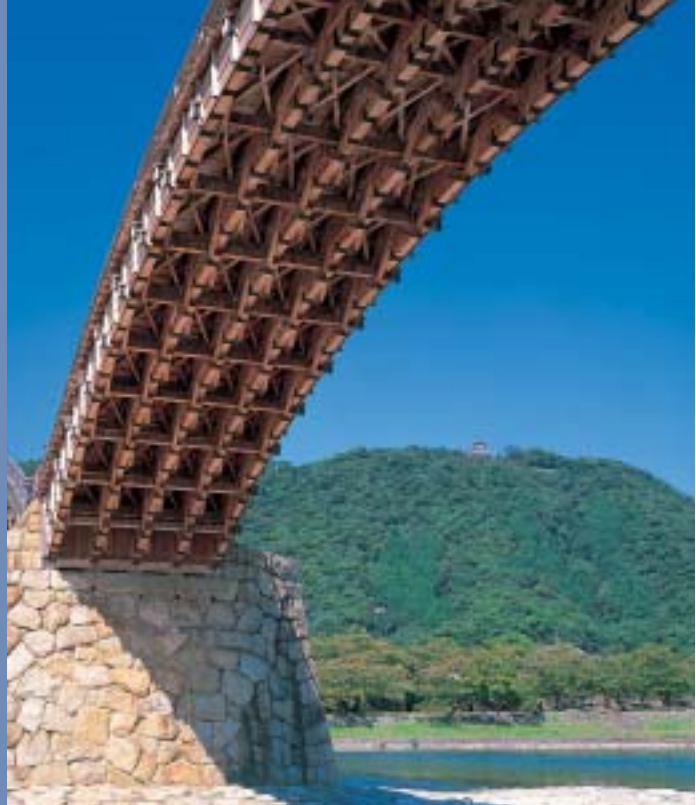
監修：岩国徴古館（岩国市） 写真：竹重満憲（岩国市在住）

貴重な文化財となった 錦帯橋

岩国で最も全国的に知られているのは錦帯橋であろう。錦帯橋は延宝元（一六七三）年に三代領主の広嘉によつて創建されたもので、錦川に架かる五連の木造橋である。日本三名橋の一つとされ、国名勝に指定されている。錦帯橋は広嘉個人の創意を基にしたとも伝えられる。

錦川に流れない橋を架けたいというのは歴代領主の悲願であったため、広嘉は家臣の青年大工に架橋技術の専修を命じ、諸国の橋も研究させた。その中には甲州の猿橋や九州の石橋があったと伝えられる。こうしてアーチ橋の技術は完成していったが、錦川が幅二〇〇メートルの大河川であることが問題として残った。

広嘉が橋をいかに構築するか悩んでいたころ、たまたま持病加療のために中国からの帰化僧である独立を招いていた。独立は杭州の出身であり、その縁で、西



優美な姿で全国に知られている錦帯橋。山頂に見えるのが岩国城

旧津山藩別邸庭園(衆楽園)

《岡山市津山市》



園の北側にある霧島。その奥には清涼軒が見える。

衆楽園は、江戸時代初期、津山藩第二代藩主森長継が京都から作庭師を招いて造営させた池泉回遊式の大庭園である。

森家が途絶え、元禄十一(一六九八)年に松平家が藩主となった当初は、他藩や他家からの使者を謁見するための「御対面所」として使われていた時期がみられるが、以後は藩主の私的な別邸として使われていた。築庭当初は現在の三倍近い規模であったという。衆楽園と命名されたのは一八七〇(明治三)年のことである。

津山城の北側に位置する衆楽園は、南北に長く、その大半を池が占めている。池には北から霧島、中島、蓬菜(浮島)、紅葉島の四つの島が施され、中島と紅葉島に架かる橋によつて水面が大きく三つに分けられている。

北の池には、東と北から築山が迫り、深みのあるもの静かな景観を見せている。池の西側に建つ余芳閣(階からの眺めは東方の山並みが借景となり、見事である。一方、中央から南は、大きな広がり

を見せる水面を海に見立て、灯籠や石組みを少なくして、できるだけ自然と一体化させている。建物は、余芳閣、迎賓館、風月軒、清涼軒などが見られる。これらの建物は、基本的に江戸時代の絵図の該当場所に再現されたものである。

かつての馬場や、園の周囲を巡る溝の大半は現在学校や住宅地となっているものの、中心となる池や島などはおおむね江戸時代の絵図に描かれた地形や形状をよく残している。

津山市出身の俳人・山口誓子が詠んだ枝垂れ桜もぜひ愛でてみたい。

二〇〇二(平成十四)年に国名勝に指定された。



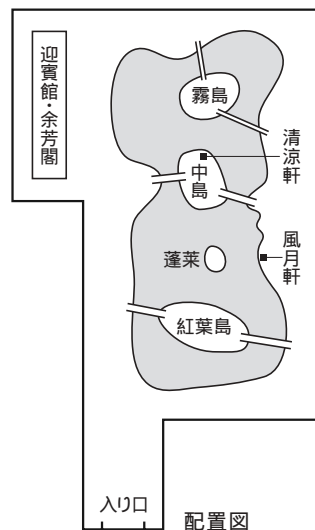
回遊の楽しさも満喫できるように観賞ルートも確保されている。



園内に施されている曲水



蓬菜の近くに立つ風月軒



神魂神社本殿

《島根県松江市》



風格がある大社造の本殿



屋根の千木(ちぎ)の先端が
平らかなことも大きな特徴

写真：古川 誠

JR松江駅から車で約二十分の「風土記の丘資料館」の近く、大きな杉林の中に静かに建つ。現存する大社造の社殿のうち最も古いといわれている。

同じく大社造の国宝である出雲大社の本殿とは規模を異にしている。しかし、床下の高さや柱の太さ、前後の中央部分にある宇豆柱うずぼしらが突出している点は古い大社造の特徴をよく残している。

神魂神社は、出雲地方の数ある神社の中でも社格が高いが、なぜか『延喜式』や『出雲風土記』にも記載されていない。なお、島根県は、二〇二二(平成二十四)年が『古事記』編さん千三百年にあたることから、今年度から「神話のふるさと」島根』を推進事業を展開している。